

「〈自己家畜化〉論」研究会開催のご案内

世話役 穴見慎一

◆研究会開催趣意

本会の目的は、動物学者小原秀雄が提唱する〈自己家畜化〉論の研究を通じ、社会的存在であり、かつ自然的存在である「人間（ヒト）」を理解することにある。

生物学では人間をヒトと表記する。つまり、人間は生物の一種である。このことは地球規模での環境危機を認識している現代人にとっては自明の理のはずだが、現代社会に生きる我々の多くがこの事実を忘却している。例えば、人間の住環境として整備されてきた現代の都市は、もはやヒト本来の環境とは質的に大きく異なっている。なぜなら、都市は人間を囲うことで、ヒトを他の生物から隔離し、別世界の存在へと変貌させたからだ。そしてこのことは同時に、人間による自然支配の思想、科学技術によって自然は制御可能である、とする認識の温床となっている。

ヒトが進化の産物であり、生物の一種であるという認識は、ヒトが今でも他の生物との間に築いてきた関係性の中での存在であることを意味するものである。しかるに、人間が社会的、文化的存在でもあることを理由に、人間を他の生物とは別世界に置く（無意識の）ヒュラルキーを前提にして自然の保護や生物の多様性を論じることは、生物としてのヒトの視点の意味する重大性を理解していないに等しい。

小原は、この重大性にいち早く気付いた数少ない論者の一人であり、1970年代から独自の人間進化論としての〈自己家畜化〉論を展開してきた。〈自己家畜化〉は、社会的存在であり、かつ自然的存在でもある「人間（ヒト）」を両面から理解するためのキーワードであり、その論は総合人間学の重要な方法論である。さらに言えば、他の生物とは異なる人間独自の「〈自然（ナチュラル）さ〉」を追究するための議論である。

この議論の特徴は、人間（ヒト）の特性の源泉を道具の制作使用に還元する点にある。すなわち、直立二足歩行の成立と共に誕生した人類は、道具の制作使用により自然の改造および大脳化を果たし、社会的存在の人間（ヒト）へと進化した、とする。そこで問われるのは、道具を介した人間と自然の関係性のあり方であり、それが人間独自の〈自然（ナチュラル）さ〉への問いの視点なのである。ここで、重要なのは、自然の人為化を宿命とする人間（ヒト）にとって、人為環境は自らの心身をどのように変化させるのか、そしてどのような人為環境が人間（ヒト）に〈自然（ナチュラル）〉であるのかという視点である。

日本でも、近代的な都市が人間を囲うようになって、半世紀以上が経過した。その住人の多くが、人工環境に違和感を持ちつつも、何が人間にとって〈自然（ナチュラル）〉か、もはや答えることはできない。本会は、小原の〈自己家畜化〉論を携えてこの難問に挑む。人間（ヒト）とは何か、自然の側から人間を視るとはどのようなことなのか、そして人為環境と人間（ヒト）の進化はどうなるのか、それが問題である。

◆第一回会合の記録

◇期 日：2013年8月30日（金）

◇会 場：日本医科大学

◇参加者：穴見慎一、岩田好宏、上柿崇英、小原由美子、亀山孝二、長谷場健、堀尾輝久（五十音順、敬称略）

◇内 容：報告①：「自己家畜化とは何か—『ペット化する現代人』を読む—」 穴見慎一

報告②：「自己家畜化と代替環境」

岩田好宏

◇総括：まずは、初会合でもあり、組織や運営の仕方などについていくつかの申し合わせをした。①本会は総合人間学会の任意の会員を基礎にしつつも開かれたものであること。学会の下部組織ではない。②研究会の開催は不定期であるが、年二、三回の土曜日開催を目指す。

次に、報告①では、小原の著作の記述をもとに、「自己」と「家畜化」の概念整理を中心にして、「自己家畜化とは何か」が論じられた。「自己」には、主体性と自動性の二つの側面があることが確認され、「家畜化」という表現が適正なものかどうかについては、小原にも多少の迷いがあることが指摘された。また、「自己ペット化」の議論の検討を通じ、現代における〈自己家畜化〉のあり方が、過度の人工化の影響により歪なものとなっている、とする小原の基本的な問題意識が確認された。小原の指摘する「人間の〈自然（ナチュラル）さ〉」の問題も、そこに起因するものである。

さらに、報告②では、〈自己家畜化〉の視点から「人間にとって良質な環境とは何か」が論じられた。ここで、代替環境とは、生物本来の環境を原環境としたとき、その代わりになる生存可能な環境という意味で用いられる。人間の場合、ヒトになった時に対応したのが原環境で、その後自身によって改変され、新たに作り出された環境が代替環境である。人間は今、自らが望んだ代替環境との関係の中で生活しているというわけだ。問題は、果たしてそれが人間にとって良質な環境かどうかである。その判断基準は、原環境に近い代替環境を形成することにあるとされるが、意図的な自然改変が人間の本性であり、その意味で、自由な働きかけの中で自然を改変し、それを利用する機会を提供できる環境の形成が重要であるとした。

報告後の協議において、今回の報告が、進化論としての〈自己家畜化〉論のメカニズムに触れていないことへの不満が出た。より具体的には、小原の「人間（ヒト）化」をどのように理解するか、ということである。そのポイントは小原独自の「人間化」（humanization）の概念を一般的な「ヒト化」（hominization）の概念とどのように関連させるか、ということである。そこで、この問題を次回の研究会で取り上げることになった。

◆第二回会合の記録

◇期 日：2014年2月21日（金）13：00 - 17：00

◇会 場：日本医科大学大学院棟1階第一会議室（1B03）

※アクセス：地下鉄千代田線根津駅下車、忍不通りを千駄木方面に約3～4分歩き、左側に「根津神社入り口」表示の路地に入り1分／地下鉄南北線東大前下車、東大地震研前を通過して約5分

根津神社正門の右隣5階建てビル（千駄木の日本医大付属病院の方ではありません）

住所〒113-0031文京区根津1-25-16日本医科大学大学院棟

（守衛室電話：03-5814-0530）

◇内 容：報告①「人間（ヒト）化」を考える—小原秀雄の著作を手懸りに— 穴見慎一
報告②「〈自己家畜化〉論から「総合人間学的本性論・文明論」へ」 上柿崇英

◇備考：報告①では、以下の二つの著作を使用する。

・小原秀雄（1985）『人〔ヒト〕に成る』大月書店

・小原秀雄（2000）『現代ホモ・サピエンスの変貌』朝日新聞社

◇参加者：芦田良幸、穴見慎一、岩田好宏、上柿崇英、小原由美子、小原秀雄、亀山孝二、河野貴美子、久保田俊司、下地秀樹、長谷場健、渡理英二（五十音順、敬称略）

◇総括：報告①では、小原氏の著作『人〔ヒト〕に成る』の記述を中心に、『ペット化する現代人』『現代ホモ・サピエンスの変貌』にも触れながら、前回確認された研究課題、「人間（ヒト）化」について、一つの見解が示された。その主要な論点の一つは、「ヒト化」のプロセスは直立二足歩行に始まり、「人間化」は道具の製作使用とともに始まるというものであり、両者は先行する「ヒト化」を基層としつつ、その上に「人間化」が展開されていくという連関を持つというものであった。また、この「人間化」こそが「自然の社会化」と「社会化された自然」における人為淘汰の開始を告げるものであり、その意味で、「人間（ヒト）」もまた「社会化された自然」であり、「人間化」とは、すなわち、「社会化」を意味するものであることが指摘された。つまり、ヒトの進化に「ヒト化」とは区別される「人間化」のプロセスを見出すということは、社会の視点からヒトを理解する試みであり、これこそが、まさに、〈自己家畜化〉論が総合人間学の視点を持つ証左である、とされた。

報告②では、これまで様々に議論されてきた小原氏の〈自己家畜化〉論の論点整理がなされ、少なくない批判にもかかわらず、この議論が、総合人間学の論理的枠組みの構築に向けて、非常に重要な視点を供する発展的可能性が指摘された。その具体的展開の一つとして、「総合人間学的本性論」と「総合人間学的文明論」の二つの柱が示された。前者は、人間の生物学的基盤である「ヒト」と「インプリント」を媒介した「人間化」の研究に関するものであり、後者は、「人間（ヒト）」と自然生態系を媒介する「社会」の概念を用いた“人間”・“社会”・“自然”の包括的研究、そこから捉えなおす人類史の研究として位置づけられる。そして、これらの枠組みを次の段階へと進めるためには、人文社会科学と自然科学の“総合”が必要であり、特に「社会」の概念を深めるためには人文社会科学の力が必要であり、「人間化」と「自然さ／ナチュラルさ」の解明には自然科学の力が要ることが指摘された。

今回の報告により、〈自己家畜化〉のメカニズムの一端が確認され、その発展的展開の可能性が示された。しかし、それは、未だ不十分なものでしかない。報告後の協議では、「人間（ヒト）化」理解には、進化論の主流をなすダーウィニズムの批判的検証が必要であることが確認され、特に、否定的な見解が根強い「獲得形質の遺伝」の視点を再考する必要があることが指摘された。そこで、この問題を次年度の研究会の課題として掲げ、更なる「人間（ヒト）化」理解に努めることになった。

◆第三回会合の記録

◇期 日：2014年8月9日（土）13：00 - 17：00

◇会場：日本医科大学大学院棟 1階第一会議室（1B03）

※アクセス：地下鉄千代田線根津駅下車、忍不通りを千駄木方面に約3～4分歩き、左側に「根津神社入り口」表示の路地に入り1分／地下鉄南北線東大前下車、東大地震研前を歩いて約5分

根津神社正門の右隣5階建てビル（千駄木の日本医大付属病院の方ではありません。）
住所〒113-0031文京区根津1-25-16日本医科大学大学院棟

（守衛室電話：03-5814-0530）

◇内容：報告①飯岡秀夫氏：「**人類の家畜化過程における「人間性（humanity）」の形成について—フロイト理論を援用して—**」

※フロイト理論の面白いところは、生物としての「ヒト」の「自然本性（人間に固有の人間的特質）」が、家畜化—自己家畜化にあらず—の過程で「人間（ヒト）」の「人間性（人間に固有の人間的心）」を生みだしていく論理を読み取れるところにあると思います。御期待下さい。

報告②岩田好宏氏：「**自己家畜化の生物学的基礎**」

※前回会合で話題に上った、「獲得形質」の遺伝についても取り上げます。

◇備考：報告①の参考文献は、次の7著作です。（今は岩波版の『全集』が主流ですが、すべて人文書院版に依拠しています。）1. 1913『トーテムとタブー』（3巻）、2. 1920『快感原則の彼岸』（3巻）、3. 1921『集団心理学と自我の分析』（6巻）、4. 1923『自我とエス』（3巻）、5. 1927『ある幻想の未来』（3巻）、6. 1930『文化への不満』（3巻）、7. 1938『精神分析学概説』（9巻）。

※問い合わせ先：ana_one67@yahoo.co.jp（穴見）まで

◇参加者：芦田良幸、穴見慎一、飯岡秀夫、岩田好宏、上柿崇英、大相麻子、大橋恵美子、小方宗次、小山芳郎、亀山孝二、河野貴美子、菅原由香、長谷場健、林良博、吉岡秀樹（五十音順、敬称略）

◇総括：報告①では、〈自己家畜化〉論の発展的展開を図るべく、フロイトの精神分析学の視点の導入が試みられた。周知の通り、前者は人間一般の進化（発達）を対象の中心とする議論であり、後者は個人の発達（進化）に焦点化した議論である。前者は、現代における人間精神の〈自己家畜化〉の問題を「自己ペット化」として告発するが、そうした現象形態の奥底にある力学を十分に説明できているとは言えない。フロイト理論はまさにこの点を補うものとして大いに期待されるものである。ただ、フロイトは人間の内面の問題を重視するあまり、社会状況が人間精神に及ぼす影響を過小評価しているように思われる。この点は、人工環境が人間に及ぼしてきた影響を重視する〈自己家畜化〉論と対照的であり、フロイト理論のままの活用が、果たして有効なのかどうかの疑念を抱かせる。これに関し、〈自己家畜化〉論の人間観は、フロイトよりもむしろマルクス的なのではないか、との意見が出されたが、必ずしもそうとは言い切れない側面（例：「モノ」を廻る議論）があることが指摘され、小原秀雄氏の人間観のトータルな把握についてのさらなる議論の必要性が確認された。いずれにせよ、今回の試みは、〈自己家畜化〉論展開の新たな扉を開くものであり、今後の議論の発展的展開を強く予感させるものであった。

報告②では、最近の分子生物学のトピック（「エピゲノム」・「メタ遺伝情報」等）の視点から、自己家畜化の生物学的基礎について、特に、獲得形質の遺伝の可能性を中心に論じられた。ダーウィンも認めた獲得形質の遺伝ではあるが、ワイズマンの生殖質説の提出以来今日に至るまでの主流派のダーウィニズムに

従えば、体細胞における遺伝子の変異が遺伝するとは考えられていない。したがって、現在、この意味における獲得形質の遺伝は否定されている。しかし、それは、遺伝情報の記憶様式を DNA に還元し、その情報発現パターンをセントラルドグマに限定した場合のことであって、「メタ遺伝情報」という考え方、すなわち、生物におけるタンパク質合成の情報代謝が DNA だけでなく、それを超えるシステムによって進められているという考え方に立てば、獲得形質の遺伝は必ずしも否定されるものではない。そして、その遺伝現象の担い手こそ、DNA 配列の変化を伴わない遺伝情報発現パターン（後天的遺伝情報）の記憶様式としての「エピゲノム」なのである。これに関し、異なる環境で長年生活した一卵性双生児の形質発現が大きく異なる事例は、遺伝子情報の発現が環境に影響されていることを示唆するものであり、エピゲノムが環境と強く関係付けられていることが理解される。自己家畜化の生物学的現象は自然環境の人為的改変の影響下で生起するものであり、それを細胞レベルでの問題として捉えた場合、エピゲノムが関わっていると見ることができよう。なぜならば、その特徴は、①環境変動が関係している。②遺伝子の変異ではなく、遺伝子発現の変異が原因とみられる。③次世代への遺伝がみられる点において、「メタ遺伝情報」を媒介とした獲得形質の遺伝として理解されるからである。生物学的現象としての自己家畜化への言及という今回の試みは、自己家畜化の概念が現代社会とそこに生きる人間存在の問題を告発するための単なるメタファーではなく、科学的言説たるか否かを示す点において大変重要なものである。しかし、仮にそうなら、自己家畜化は「家畜化」との類似においてではなく、「家畜化」そのものとして語られる必要があるのではないか。また、そうでなければ、「家畜化」の語をあきらめる必要があるのではないか。その意味で、これまで幾度となく繰り返されてきた「家畜化」の語の使用が適切か否かの論争を改めて検討する必要があるのではないかと思う。

◆第四回会合の記録

◇期 日：2015年2月14日（土）12：30 - 17：00

◇会 場：日本医科大学大学院棟1階第一会議室（1B03）

※アクセス：地下鉄千代田線根津駅下車、忍不通りを千駄木方面に約3～4分歩き、左側に「根津神社入り口」表示の路地に入り1分／地下鉄南北線東大前下車、東大地震研前を歩いて約5分

根津神社正門の右隣5階建てビル（千駄木の日本医大付属病院の方ではありません。）

住所〒113-0031文京区根津1-25-16日本医科大学大学院棟

（守衛室電話：03-5814-0530）

◇内 容：報告①12:30～14:00（90分）

穴見慎一氏「獲得形質の遺伝と〈自己家畜化〉論の連関を問う」

[コメンテーター：長谷場健氏・岩田好宏氏]

報告②14:15～15:30（75分）

岩田好宏氏「〈自己家畜化〉を問い直す——代替概念の可能性を探る」

報告③15:45～17:00（75分）

木村光伸氏「生活を通して人間は何を獲得してきたのか」

◇参加者：芦田良幸、穴見慎一、岩田好宏、上柿崇英、大橋恵美子、大橋、小方宗次、小原秀雄、小原由美子、小山芳郎、亀山孝二、河野貴美子、木村光伸、中村昭男、長谷場健、林良博、堀尾輝久（五十音順、敬称略）

◇総括：報告①では、単なるメタファーではない科学的言説としての〈自己家畜化〉概念を示すには、自己人為淘汰が種の形質を規定するメカニズムを「獲得形質の遺伝」の視点から説明することが有効ではないか、との議論が展開された。その手掛かりとされたのは、柳下登氏（東京農工大学名誉教授）が多年にわたり研究・開発してきた栽培植物「ピートン」（登録品種名「柳下1号」）であった。これはトウガラシにピーマンの反復接木（計5回）を行うことで、トウガラシにピーマンの形質を取り入れてできた固定種であり、柳下氏がルイセンコ遺伝学（ミチューリン生物学）の例証としていることが紹介された。それは確かに、接木という人為的操作により新形質が獲得された結果誕生した新品種とも理解できるが、他のメカニズムの可能性（例えば、接木の刺激による潜在的な遺伝子の発現など）は否定されず、何より、遺伝的構成の変化が確認されていない点において、「獲得形質の遺伝」と断定することはできない。また、質疑においては、ミチューリン生物学が獲得形質を人間の操作性によるものとした点がラマルキズムとは決定的に異なることが指摘され、ラマルク以来の「獲得形質の遺伝」の理解が混乱してきている状況が露わとなった。しかしながら、「エピゲノム」の視点に立てば、食事や飲酒の習慣による「獲得形質の遺伝」の事例がいくつも報告されており、ラマルキズムとは異なった仕方での「獲得形質の遺伝」の提案は可能であろう。いずれにせよ、本会におけるポイントは「獲得形質の遺伝」の提示による〈自己家畜化〉現象の論証にある。その意味において、今後は、「エピゲノム」の視点からのより実証的な報告が期待される。しかしながら、注目すべきは、〈自己家畜化〉論を提唱した小原氏自身が「獲得形質の遺伝」の視点を重視しているとは言えない点である。この温度差の原因が何なのか、追求の必要は残されたままである。

報告②では、「自己家畜化」概念を基礎から規定し直す作業を通じて、小原氏の〈自己家畜化〉論の問題提起を整理しつつ、それを踏まえた代替概念の可能性が模索された。それというのも、人間存在を「家畜化」の視点から把握しようとする〈自己家畜化〉論には誤解が多く、その主張の本質とは無関係なところに、この議論の普及を阻んでいる原因が認められるからである。（また、そこには、人間進化の独自性を道具の製作・使用の視点から展開する小原理論の本質が、果たして「家畜化」概念で説明し得るものなのか、という根本的な疑問もある。）そこで示された「代替概念を考える基本原則」は、①「自己家畜化」という概念が生まれた経緯を十分に踏まえ（「家畜化」という事実⇒「家畜化現象」という事実⇒アイクシュテットの「自己家畜化」現象という概念⇒小原氏の「自己家畜化」論という理論）、②「家畜化」という概念の代わりに、その人間における「主体—環境」関係に焦点をあてて、その本質を明確にした概念を用いること（自分たちを、自分たちによって、自分たちにとって適したと思う人間に改変し、自分たちにとって良質と思ってつくった環境のなかで生活する

人間行為)、そして③概念設定の原則として独自の用語を用いて概念規定を明示し、他分野の用語の転用は避ける、というものであった。ここで①と②に従えば、小原氏の「自己家畜化」の代替概念として「自己管理化」が適しているが、「管理化」という表現もまた、他分野の用語として広く用いられているため、その点が③に反するとして不十分とされた。そこで、この「自己管理化」を人間における「主体—環境」系に力点をおいて把握し直し、二つの場合分けに応じた代替概念が提示された。その一つは、人間の「主体—環境」系の特徴を重視した、「自己動的「主体—環境」系形成論」であり、もう一つは、それを史的に見た、「自己代替「主体—環境」系論」である。(尚、ここで、人間における「主体—環境」系の視点が重視されているのは、小原氏の「自己家畜化」論の主張が道具の製作・使用の視点から展開される点を踏まえているからである。)

報告③では、「獲得形質」と「自己家畜化現象」の再検討が行われた。一般に、「獲得形質の遺伝」といえばラマルクの学説(「器官の用不用」と誤解されている)であり、ダーウィンはそれに代えて「自然選択説」を提出したかのように思われがちだが、ダーウィンはまた特定器官の用不用が変異の原因の一つであること(「獲得形質」)、そして、それが遺伝することを認めていた。その意味で、両者は共に進化における生物の主体性というものを理解していたのだが、それが生活とどのように関係していたのか、という点においては異なる見解を持っていた。ラマルクはそこに「主体的な変化」すなわち「目的論的变化 (besoin : 必要・要求)」を、ダーウィンは「生存の為の個体闘争 (struggle for existence)」を視ていた。ところで、生物の生活の学が生態学だが、生態学の視点から「獲得」という概念を見た場合、例えば報告者のサル調査からわかるのは、サルは生活の中で自らの生きる場と生き方を獲得している、ということである。それは、ヒトが人間化する過程においても同様であったと推測されるが、そこに「自然の社会化」が絡んでくることで、ヒトはサル(あるいは哺乳動物一般)から大きく離れていくのである。その意味において、「獲得形質」および「獲得形質の遺伝」という概念は、まことに人間的概念であり、(自己家畜化)論と「獲得形質の遺伝」とを結んで議論するのであれば、それを小原氏から学ばねばならないのである。そのためにも、まずは、「獲得形質」とは何を指すのかが明らかにされねばならず、その意味で、ラマルキズムがどのように理解され、どのように否定されたのかを理解する必要がある。そのポイントの一つは、「生物の主体的変化」の真意とは何かであるが、例えば、報告①で援用されたミチューリン生物学は、それを人間の恣意的な操作性に置き換えて理解した点で、大きな過ちを犯していたと報告③の演者は考える。なぜならば、ラマルキズムはあくまで自然界における生物的過程に関する議論だからである。しかし、そうなると、果たして進化論は、人間の社会発展の図式を対象とすることが可能なのか、という疑念が湧いてくる。すなわち、小原氏によれば、「自己家畜化」は「文化・文明の檻」の中で、ヒトという生物性を内包した人間が自らを適応させ、形質も変化させていくことであり、人間の「自己家畜化」は生まれた時からスタートしている、とされるが、この過程に進化を見ることができかどうかのポイントである。また、仮に一方で、「獲得形質の遺伝」が生物としてのヒトが身に

まとった文化（例えば、道具の使用）を通して展開されたとするならば、他方で、「自然選択」は生物的過程なのであり、両者は〈自己家畜化〉論において矛盾しないのであろうか、という新たな疑念も湧いてくるのである。そして演者③はそのように予想している。

◆第五回会合の記録

◇期 日：2015年8月22日（土）13：00 - 17：00

◇会 場：日本医科大学大学院棟1階第一会議室（1B03）

※アクセス：地下鉄千代田線根津駅下車、忍不通りを千駄木方面に約3～4分歩き、左側に「根津神社入り口」表示の路地に入り1分／地下鉄南北線東大前下車、東大地震研前を歩いて約5分

※根津神社正門の右隣5階建てビル（千駄木の日本医大付属病院の方ではありません。）

住所：〒113-0031 文京区根津1-25-16 日本医科大学大学院棟
（守衛室電話：03-5814-0530）

◇内 容：報告①13:00～14:30（90分）

林 良博氏「〈家畜化〉とは何か」（仮題）

報告②14:45～16:15（90分）

上柿崇英氏「総合の「中間理論」と自己家畜化論」

会 議 16:30～17:00（30分）

「〈自己家畜化〉のフォーラム構想について」

◇参加者：穴見慎一、阿部信行、岩田好宏、上柿崇英、大橋恵美子、小方宗次、小原秀雄、小原由美子、オプヒュルス鹿島ライノルト、亀山孝二、河野貴美子、木村光伸、下地秀樹、中村昭男、長谷場健、古沢広祐（五十音順、敬称略）

◇総 括：報告①（林氏の報告）がキャンセルとなったため、そのテーマ設定に至った経緯や研究会として報告に期していたことなどが世話役の穴見氏から説明され（別紙参照：「〈自己家畜化〉論研究会レビュー①」）、それらとの関連で、特に「形質の獲得性」を廻って、木村氏にご発言頂いた（別紙参照：「ラマルクの進化思想の現代的意義から総合人間学へ」「生活を通して人間は何を獲得してきたのか」）。と言うのも、木村氏には前回の報告③で、「獲得形質」と「自己家畜化現象」の再検討を行って頂いたからである（その時の報告内容を中心にまとめられたものが今回配布の「生活を通して人間は何を獲得してきたのか」である）。その際、大変印象的だったのは、〈自己家畜化〉論を「獲得形質の遺伝」の視点から理解しようとする研究会の論調に対して、木村氏が「自己家畜化論において「自然選択」と「獲得形質の遺伝」とは矛盾する可能性がある」ことを示唆された点であった。しかし、今回、その可能性は木村氏自らが否定され、自己家畜化論において「自然選択」と「獲得形質の遺伝」は矛盾しない、つまり両者は「進化的に併存しうる」とされた。ただし、そこには二つの前提条件（「①自然選択は生物的過程である。」「②獲得形質の遺伝は生物としてのヒトが身にまとった文化（例えば道具使用）を通して展開された。」）があることが示された。そして、そのように考えることで、生

物進化と人類進化を統合的に理解することができ、それを理論化してきたのが小原氏である、との指摘があった。しかし、そもそも小原氏自身は〈自己家畜化〉論において獲得形質の視点を重視してはいないので、これは小原氏の議論を補う意味において、木村氏独自の自己家畜化論解釈と位置づけられるべきであろう。示された二条件のうちの前者は小原氏の「ヒト化」の過程に、後者は「人間化」に対応しているとも理解できるが、仮にそうではなかったとしても、自己家畜化において両者がどのように関連しているのかを示すことは重要である。そして、この点に関し、〈自己人為淘汰〉概念を疑い始めている（「使用しない方がよい」という木村氏の発言は大変興味深い。なぜならば、その疑問は小原氏の人間観ともいえる「人間（ヒト）」の内実自体に対する疑義に端を発するものだからである。そこでさらに興味深かったのは、木村氏のこの根本的な疑義を察知されたのか、それまで沈黙を守られていた小原氏が、不意に「その場合、「人間化」はいつから始まったのか？」と発言された。筆者も含め、周囲は一瞬、興奮と緊張とが入り交じった空気に包まれたが、木村氏は咄嗟に「人類が二本足で立ち上がった時です。」と答えられた。報告時間の都合上、この興味深いやり取りはそこまでであったが、それを聞いた小原氏はたいそう驚かれた様子であった。しかし、それも当然のことと理解できる。なぜならば、小原氏の〈自己家畜化〉論では、直立二足歩行は「ヒト化」の開始を意味し、「人間化」はその後の道具の製作・使用を開始するとされているからである。木村氏の指摘はそれらを否定するものであったのだが、それが「人間（ヒト）」の内実の批判へとどう展開されるのか大変興味深いところであり、また、〈自己人為淘汰〉概念を再検討することは「家畜化」概念理解においても重要な契機になると考えられる。例えば、「人為淘汰」は〈自己家畜化〉のメカニズム説明に関する概念として理解されるが、そこに「自己」をダイレクトにくっつけて〈自己人為淘汰〉とすることが、「人為淘汰」本来の意味を損ねることになっていないのか。それはまた、「家畜化」に「自己」をくっつけて〈自己家畜化〉としたことへの批判的検証にもつながり、これまでくすぶってきた〈自己家畜化〉という名称の適否を廻る議論として、本会の一つの大きなテーマとなるものでもある。

また、こうした議論とは別に、「代替環境論」という視点から「家畜化」理解に迫り、「自己家畜化」概念を再考する試みを岩田氏が報告された（別紙参照：続「代替環境論」―「自己家畜化」概念再考続き）。その議論の独自性は、家畜と野生動物の間に「里動物」を第三の存在として位置づけ、それを媒介にして、人為淘汰と自然淘汰の連関を見出そうとする点にある。その具体例として、今回は「いえねずみ類の進化」が取り上げられ、家畜化現象と似たものが家畜化とは関係なく認められ、それが代替環境における生活の影響として理解されることが述べられた。そしてさらに、もう一つの話題「カワヨシノボリの起源について」では、降海型のヨシノボリとの「すみわけ」によって成立した一群（おそらく、生態変化に伴う遺伝的変異集団）としての野生動物（カワヨシノボリ）の存在の可能性が示唆され、「里動物」のみならず、野生動物の中にも、家畜化現象（この場合は、生態変化に伴う

遺伝的変異)と類似したものがあるのではないかと、との問題提起がなされた。無論、二つの話題はともに岩田氏の推測の域を出ない部分もあるが、〈自己家畜化〉論における自然淘汰と人為淘汰の具体的連関を理解しようとしている本研究会にとって、いずれも重要な話題提供であることは間違いない。残念ながら、時間の都合上、この報告は概要を述べて頂いただけに止まったので、岩田氏には機会を改めて再度ご報告いただきたいと思う。

報告②では、本研究会主催による「〈自己家畜化〉論のフォーラム構想」の実現を見据え、上柿氏に総合人間学における「総合」の方法論としての〈自己家畜化〉論の持つ潜在力(可能性)についてご報告いただいた。(この報告は、2015年3月21日に立教大学で開催された総合人間学会2014年度第2回研究会における同氏の報告を基調にしたものである。)それは、3本の柱(①総合人間学のあゆみ、②「総合」の方法をめぐって、③「総合」の中間理論——小原秀雄「自己家畜化論」を例に)からなるが、本研究会との関係上、今回は特に③を意識した報告となった。その意味では、逆に、②の視点の重要性が改めて強調される結果となり、〈自己家畜化〉論と総合人間学との連関を問う大変良い機会となった。これに関し、上柿氏の議論のポイントの一つは、いわば、「総合の〈二段階論〉」とでも表現されるものであり、学会のこれまでの試みの様に、具体的なテーマ設定に基づいた各分野からのダイレクトな「総合」(以後「単純総合」と呼ぶ。)を目指すのではなく、各分野の視線が交差する契機として特定の議論(「中間理論」)を論者間で共有し、それを経由させた議論どうしを連関させる仕方での間接的な「総合」(以後「交差総合」と呼ぶ。)を目指すべきである、とするものである。したがって、「総合」の第一段階としては、この「中間理論」を準備し、論者間で共有するプロセスが必須となる。ここで重要なのは、この「共有する」ということが、単に「中間理論」を理解するということには止まらず、論者自身がその独自展開を図り、各々の専門との結合を成し遂げることを意味する点である。そして、それを踏まえた第二段階で、「中間理論」を介した具体的なテーマの最終総合が達成されるのである。こうした主張は、これまで曖昧なまま放置されてきた「総合」のイメージを大きく揺さぶるものであり、「総合」とは何かを問う新たな契機として総合人間学会でも高く評価されている。上柿氏によれば、その「中間理論」たる議論の一つこそが〈自己家畜化〉論であり、それ故、本研究会の試みこそが「総合」の第一段階にあたるものとされる。〈自己家畜化〉論が総合の「中間理論」たる理由は、この議論が「人間」を捉えるための一つの「総合的な枠組み」であり、この枠組み自体が多様な学問(研究)で応用可能な点に求められる。中でも、小原氏の「人間(ヒト)」概念は、人間は生物種としての「ヒト」を内に含む形で社会的に実存するという意味で、「総合的人間学」に相応しい表現である、と評価される。さらに、上柿氏は自らが専門とする哲学・社会理論の分野における〈自己家畜化〉論の応用の具体例として、人間・社会・自然の三項関係に着目した「総合人間学的文明論」と「総合人間学的本性論」の展開の可能性を示し、他にも他分野における活用の可能性に言及された。重要なのは、既に指摘された

通り、多様な領域が同じ「中間理論」を共有しながら、「人間」を新たに捉え直す試みを実践することなのである。ただし、長期的な展望に基づく総合人間学の展開においては、複数の「中間理論」が必要であり、今後は、さまざまな機会を捉えて、本研究会と同様の試みがいくつもなされる必要がある、とのことであった。それは一方では、本研究会にとって勇気と自信を与える大変嬉しい指摘ではあったが、他方では、「総合」の困難さを改めて認識させる意味において不安の残るものでもあった。なぜならば、〈自己家畜化〉論は動物学者小原秀雄が40年という学者人生をかけて構築してきた議論であり、そのエッセンスの吸収と独自の議論展開にも各々の論者でそれなりの時間が費やされてきたからだ。すなわち、そもそも「中間理論」足り得る既成の議論は稀有であり、仮にそれを構築しようとするならば、そこには既に「総合」の要素が含まれるものと理解される。それが論者間で共有され、しかもそれが複数行われることは極めて困難だと思われ、上柿氏の主張する「総合」の第一段階の克服こそが「総合」の問題の本丸であることが分かる。極端な見方をすれば、上柿氏の議論（「交差総合」）は、これまでのダイレクトな「単純総合」が孕んでいた問題点を「総合」の最終的な段階から摘出し、それとは別の「総合」の第一段階に移植し直しただけなのかもしれない。しかし、それでも上柿氏の試みに筆者が魅了されるのは、その主張のエッセンスが、これまでのダイレクトな「単純総合」の試みの中にも無意識な仕方ではあったが確かに存在していたからである。そうした試みの典型の一つが総合人間学会の第7回研究大会（長谷場実行委員長）におけるシンポジウムであった。それはまさに、〈自己家畜化〉論をベースにして構想されたシンポジウムであったが（ただし、種々の訂正が施され、原案通りには実施できなかった。）、より重要なのは、シンポジストへの事前連絡を通して、論者間でのキーワードの共有を試みた点である。すなわち、シンポジウムのテーマに関するいくつかのキーワードを事前に提示し、それらを共有することで、各々の議論が自ずと交差する契機を意図的に生み出そうとしたのである。しかし、この試みは上手くは行かなかった。シンポジストは誰もキーワードを意識して用いなかったからである。連絡によるお願いだけでは、議論におけるキーワードの共有でさえ困難なのだ。そこに欠けていたのは、上柿氏が指摘した「総合」の第一段階（特に、「共有」）に相当するプロセスだったのである。そして逆に、この事実が論者間で何か（「中間理論」やキーワード等）を共有することの難しさを示唆しているようにも思う。それ故また、今回の報告における質疑で出されたように、そもそも、総合人間学における「総合」とは何か、を改めて問う必要があるのだと思う。いずれにせよ、上柿氏の議論をこのまま放置せず、より突き詰めた仕方で検討する必要を強く感じる。また、その作業を通じてこそ、総合人間学における「総合」の輪郭が見えてくるのではないかと思われる。

◆第六回会合の記録

◇期 日：2016年2月27日（土）13：00 - 17：00

◇会場：日本医科大学大学院棟 1 階第一会議室（1B03）

◇内容：報告①13:00～14:30（90 分）

木村 光伸氏「人間（ヒト）と〈自己人為淘汰〉概念を問い直す」（仮）
報告②14:45～16:15（90 分）

長谷場 健氏「〈自己家畜化〉の視座から人間学における総合を問う」（仮）
会議 16:30～17:00（30 分）

「研究会の今後について」等

◇備考：古沢先生からの情報ご提供

先日、BS のプレミアムカフェ・再放送番組を視聴しましたが、自己家畜化に関する大変興味深い番組でした。（ご覧になった方もいると思います）

自己家畜化論の新展開が垣間見れますので、議論の素材として、皆さまと共有し、議論展開の題材にできればと思います。（幸い、ネットにて視聴できますので、ご覧ください）

いのちドラマチックスペシャル「オオカミはこうしてイヌになった」

初回放送：2011 年 8 月 26 日 / 87 分

15000 年前、オオカミを“イヌ”として飼うようになってからイヌの歴史が始まった。福岡伸一さんが紐解く進化の歴史。

（12 月 3 日（木）午前 9 時 00 分～ 再放送 12 月 11 日（金）午前 0 時 45 分～）

紹介サイト：

<http://www.veoh.com/watch/v21231383XnztX38D>

オオカミはこうしてイヌになった ～遺伝子 1 万 5 千年の旅（NHK BS・動画 11/8/26）

<http://t.co/SD2qKf0aZk>

（関連サイト）

http://blogs.yahoo.co.jp/aonet_jp/27101234.html

<http://air.ap.teacup.com/donmain/2824.html>

・・・生物学者 福岡伸一：「警戒心がない」とは子供の特質。

「人間は、自分自身を家畜化することで文明を生んだのか？」

・・・2009 年：リュドミラ・トルート

DNA の基本配列以外のエピジェネティックな変化により家畜化が進む。

「家畜化は動物をヒトになれさせる、文明はヒトがヒトに順応する」

「人は、より家畜化され存在してきた」・・・人類再帰的家畜化進化論？

◇参加者：穴見慎一、飯岡秀夫、岩田好宏、小原秀雄、小原由美子、亀山孝二、河上睦子、河野貴美子、木村光伸、下地秀樹、中村昭男、長谷場健、堀尾輝久、

横湯園子（五十音順、敬称略）

◇総括：報告②では、〈自己家畜化〉論と総合人間学との接点を改めて考える試みが展開された。報告者の長谷場氏は自らが責任者を務められた2012年総合人間学会第7回研究大会のシンポジウム（「3.11と総合人間学——人間（ヒト）・未来への選択」）を振り返り、その試みの中で〈自己家畜化〉論の視点を上手く生かせなかったことを反省しつつ、何故できなかったのか、どうすべきであったのか、について、ご自身の〈自己家畜化〉論理解の視点を交えながら言及された。一般的な理解において、〈自己家畜化〉論は、環境を積極的（意識的）に改変する人間の能動性（主体性）の側面の議論と、その改変した環境の影響から決して逃れられない人間の受動性の側面の議論から構成されるが、長谷場氏の主張では前者の側面が強調される傾向にある。それは、シンポジウムのサブタイトルにある「未来への選択」に顕著に表れている。すなわち、「3.11」に象徴されるような問題に満ちた現代社会から、人間（ヒト）に相応しい〈ナチュラル〉な未来社会を選択すべきであり、人間（ヒト）にはそれが（選択）できる、という主張である。今回の報告で確認されたことの一つは、そうした長谷場氏の論調の背景には、幼児教育研究の碩学であった近藤薫樹氏の議論の強い影響がある、ということであった。近藤氏もまた〈自己家畜化〉論に魅了された研究者の一人であり、そこから人間理解についての独自の見解を導き出された。そのキーワードが〈自律〉であり、長谷場氏はそれを人間理解のポイントに据えられている。つまり、現代社会は「人間の自律」が失われた社会であるが故に問題なのであり、「人間の自律」が成立し得る社会の構築こそが選択されるべき未来なのである、という主張である。その論拠として長谷場氏が挙げるのが、生命の歴史（進化）を自由の拡大として捉える議論である。この場合の「自由の拡大」とは、水中で誕生した生命体がやがては陸上に進出し、体制を発達させていく中でより乾燥した場所でも生活可能となるように、環境からの相対的独立性を高めていったことを指している。人間（ヒト）という存在は、そうした進化の流れの中にあり、その延長上に「人間の自律（自由）」獲得の重要性が理解される、というものである。こうした発想は、人間（ヒト）が生物という自然の存在でありながら、社会的・文化的存在でもある、とする〈自己家畜化〉論の人間観の理解において極めて重要である、と思われる。なぜならば、そこには大きく二通りの理解の可能性がある、そのどちらを採用するかによって、人間（ヒト）の理解が大きく異なってくるからである。これに関し長谷場氏は、かつて人間存在の理解を廻って展開されてきた「小林—佐藤」論争における主要な論点に触れて、その一つは、「人間は生物である。けれども、社会的・文化的存在である。」という理解の仕方（小林理論）であり、もう一つは、「人間は生物である。だから、社会的・文化的存在である。」（佐藤理論）とされる。前者には、人間が生物の一種であることを認めながらも、他の生物とは一線を画す特別な存在である、とする近代主義の尾を引くような人間観が現れている（佐藤氏による小林氏批判）。これに対し、後者では、人間の特殊性が相対化され、他の生物が各々の特殊性を持つ（例えば、鳥が空を飛び、魚が深く潜れる）よ

うに、人間は社会的・文化的存在でしかない（例えば、空も飛べなければ、水中深く潜れもしない）、のである。長谷場氏の主張は、無論、後者の立場からのものであり、それ故、大変重要な指摘なのである。ただし、「人間の自律（自由）」の重要性を指摘するために、進化史を生物の「自由の拡大」として把握する視点は、擬人化の誹りを免れ得ないだろう。何故ならば、自由など、自然界（物質の世界）にあらうはずもないからである。それは、まさに社会・文化の領域（シンボルの世界）における概念でしかないのである。またそれ故に、人間にとっては極めて重要な問題となるのである。（そして、おそらく、長谷場氏は既にこの問題に気付いておられるように思われる。何故ならば、長谷場氏は人間と言語との関係についても言及され始めているからである。）また、「人間の自律（自由）」の重要性を指摘するだけでは、人間存在の自然的側面を軽視する（近代主義的）議論に与するものとの誤解も生じかねない。したがって、擬人化への陥穽を斥けつつ、生物だからこそ、進化のプロセスにおいて「自由」を必須の存在条件とするようになった人間の特殊性を論じることが、長谷場氏の課題の一つとなるのではないだろうか。

報告①では、報告②で示された、〈自己家畜化〉論における人間（ヒト）理解の二つの立場に関する、より先鋭化された議論が（先取りされる形で）展開された。無論、報告者の木村氏が、その問題に直接言及されたというわけではない。しかし、これまでのご発言の内容を踏まえて、今回のご報告を伺うと、木村氏の〈自己家畜化〉論理解の根底には、「人間は生物である。だから、社会的・文化的存在である。」というテーゼが据えられていることが理解される。そして、おそらく、この基本理解があるからこそ、木村氏は、「自己人為淘汰」という概念を棄てよう（〈自己家畜化〉論における「人為淘汰」概念の使用禁止と言ってもよい。）とされているのだと考えられる。なぜなら、人間が生物であるから社会的・文化的存在となった、とするのであれば、それは、自然淘汰の結果として理解されなければならないからだ。そこに、自然淘汰とは区別される人為淘汰という概念を持ち込むことは、結局、人間を他の生物とは根本的（質的）に異なる存在と見做している証でしかないのだ。したがってそれは、「人間は生物である。けれども、社会的・文化的存在である。」とする立場に与するものでしかない。繰り返すが、無論、今回の報告で、木村氏がそのことを明示されたわけではない。しかし、そうした筆者の憶測が、決して独りよがりなものではないことを今回の報告内容に則して以下に改めて示そうと思う。今回の木村氏の試みの中心にあったのは、〈自己家畜化〉論の中心概念の一つである「人間（ヒト）」概念の再考である。「ヒトが人間になったのではなく、ヒトは人間（ヒト）となった」とする小原氏によるこの人間観を「そうとしか言いようのないもの」として木村氏も基本的には肯定される。しかし、木村氏によれば、「ヒトが人間（ヒト）」になったのではなく、「サルが人間（ヒト）」になった、とされる。ここに、人間の進化プロセスにおける小原氏との決定的な相違が認められる。すなわち、小原氏は人間進化のプロセスを「サル→ヒト→人間（ヒト）」として捉え、後半の「ヒト→人間（ヒト）」を〈自己家畜化〉の名で呼んだ。つまり、両

者の違いは、人間の進化プロセスにおいて、サルでもない、人間（ヒト）でもない、純粋なヒトの段階を認めるかどうか、という点に集約される。小原氏はこれを認め、木村氏はそれを認めない方向での議論展開を考えておられるのである。両者の見解を分かつ原因とは何か。それは、小原氏が「ヒト化（hominization）」と「人間化（humanization）」とを区別されるのに対して、木村氏はそれらを一体のもの（「人間進化の二側面」）として理解しようとするからである。この点は、〈自己家畜化〉論理解において極めて重要である。なぜならば、小原氏がそれら二つを区別される理由は、ヒト化が自然淘汰による進化のプロセスであるのに対し、人間化が〈自己人為淘汰〉によるプロセスであると考えられ、そして、この〈自己人為淘汰〉という概念こそが〈自己家畜化〉の別名でもあるからだ。仮に、ヒト化と人間化とを区別しないとすれば、特に、人間化をヒト化の延長として考えるのであれば、それは〈自己家畜化〉論が登場する以前の人間進化論に戻ることであり、〈自己家畜化〉論そのものを否定することにもなり得る。無論、木村氏の議論の試みはそれを意図したものではない。「人間進化の二側面」という表現からもわかるように、木村氏がヒト化と人間化とを区別されていることは明らかであり、人間進化における人工物の影響を自然物の場合と同一視されてはいない。では、両者の見解の相違の中心には何があるのか。それは、人間進化のプロセスにおいて、ヒト化が先行し、そこに人間化が重なり、相互に影響しあいながら同時進行して行く、とするのが小原氏の理解（「サル→ヒト→人間（ヒト）」）であるのに対し、木村氏の場合はヒト化と人間化とは初めから同時進行（「サル→人間（ヒト）」）となるのである。そして、その論拠は、小原氏が、人間進化の道程を「直立二足歩行→道具の製作・使用→高度な精神機能」の順にある程度のスパンを置きながらそれらの形質を獲得して行くプロセスとして理解されているのに対し、木村氏はそれを「直立二足歩行⇄道具の製作・使用⇄高度な精神機能」の獲得として把握されようとしている点に求められる。それ故、今回のご報告のタイトルが「ヒト化あるいは人間化と脳の進化——脳と行動の人間学的考察」とされているのであり、報告の中で、そうした発想に至った主要な契機として、前回（第五回）会合での小原氏との質疑のエピソード（第五回会合（総括）参照）が取り上げられているのである。すなわち、「人間化はいつから始まったのか？」という小原氏の問いかけに対して、木村氏が「人類が二本足で立ち上がった時です。」とお応えになった時点で今回の議論の源泉が認められるのである。無論、この試みは端緒についたばかりであり、これから吟味・検討にふされ、深化・展開されて行くべきものである。〈自己家畜化〉理解を深める上で、小原氏の理解の方向で行くのか、木村氏の方向で模索するのか、筆者にとっても思案の為所である。ただ、現時点で直観し得ることの一つは、冒頭でも触れたように、木村氏の理解の方が、「人間は生物である。だから、社会的・文化的存在である。」とのテーゼ理解により接近している、ということである。なぜならば、人間が生物であることを前提とする以上、その進化に自然淘汰とは質的に異なる人為淘汰を想定するのは論理矛盾を冒すものであり、しかし同時に、淘汰圧として

の自然物と人工物との違いは区別する必要があると考えられるからである。つまり、淘汰圧としての質的差異は認めつつも、淘汰原理としての同一性が保たれなければ、人間を生物の延長として理解することはできない、と思われるからである。その意味では、人為淘汰（家畜化）から自然淘汰の発見へと進んだダーウィンも、人為淘汰（家畜化）から〈自己家畜化〉論へと進んだ小原氏も、共に正しかったのであり、またそうであるなら、両者の議論を関連付けてより深く理解するために、われわれの人為淘汰（家畜化）への理解を深化させる必要があるだろう。そして、この様な視点に立つ時、筆者には、前回会合での岩田氏の報告が想起されるのである（第五回会合〈総括〉参照）。

◆第七回会合開催のご案内

◇期 日：2016年8月20日（土）13：00 - 17：30（12:30 開場）

◇会 場：立教大学 16 号館第一会議室

※会場となる 16 号館は正門のあるキャンパスとは道路を挟んで反対側のエリアにあります。

周囲をフェンスで囲まれており、入口は 5 号館側からの一か所のみで、少し分かりづらくなっております。

このため、12:40－12:55 の 15 分間は、世話役の穴見が入り口付近に

「総合人間学会・研究会」のプレートを持ち、案内に立ちますので、会場探しに不安のある方は、その時間内におこし下さい。

◇内 容：報 告 13:00～14:30（90 分）

岩田好宏氏「自然淘汰・人為淘汰と自己家畜化との関係」

座談会 14:45～16:45（120 分）

「〈自己家畜化〉論を問い直す——ヒト化と人間化との連関の視点から（仮）」

会 議 17:00～17:30（30 分）

「今後の研究会の方向性、次回の設定について」等

以上